



TITLE:

救済史の神学(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山本, 和

CITATION:

山本, 和. 救済史の神学. 京都大学, 1967, 文学博士

ISSUE DATE:

1967-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212211>

RIGHT:

【 2 】

氏 名	山 本 和 やま もと かのう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 25 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	救済史の神学

論文調査委員 (主 査) 教授 武 藤 一 雄 教 授 武 内 義 範 教 授 野 田 又 夫

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、前世紀の半ば頃、ベンゲル、ホーフマン等によって用いられ、近時新たに取りあげられつつある「救済史」の概念について極めて包括的な神学的究明を行なうことを課題とするものであり、次のとき11章から成っている。

- I 神学的思惟の基礎概念
- II 救済史と世界史
- III 恩寵の選びと救済史
- IV 救済史の展望
- V 摂理と歴史
- VI 歴史と実存
- VII 救済史の時
- VIII アダムとキリスト
- IX 人間形成論
- X アジア宣教の神学的課題
- XI カルヴィン神学の現代的意義

Iは全体の序説をなし、神学的思惟の基本的三形式（釈義的思惟、批判的思惟、実践的思惟）を論じ、著者の神学的立場を明らかにする。

IIは救済史と世界史との関係を論じ、世界史の内的根拠であり目標である救済史という神学的観点を提示する。

IIIは救済史の起源のキリスト論的究明として、「予定」ないしは「恩寵の選び」の問題を論ずる。

IVは教義学の基本的主題をなす神論、創造論、和解論、救贖論等にわたって、「救済史」の神学からする照明を与え、それによって、これらを統一的に把握しようと試みる。

Vはいわゆる摂理信仰のもつキリスト教歴史観としての独自の意味を明らかにしようとする。

VIは世界史における「救済史」に対する否定的要素を論じ、それとの関連において、哲学的小説および神学的小説論を批判する。

VIIは古代から近代にいたる神学的小説および哲学的時間論の歴史を概観し、最後に聖書の時間概念を究明する。

VIIIはキリスト論に基礎づけられた人間学を提示するとともに、現代における人間論の諸問題を取りあげている。

IXは人間形成の根拠と目標をキリスト論から展開するべき課題として論じている。

Xはアジア宣教の課題として、欧米と異なる新たな伝道神学の必要を提唱する。

XIは第1章に述べられた神学的思惟の方法論的反省を補うものとして、カルヴィン神学の現代的意義について述べている。

論文審査の結果の要旨

著者は、本論文において、曾て19世紀の半ば頃、ベンゲル、ホーフマン等によって初めて考察され、近時改めて最も重要な神学的課題の一つとして取り上げられるにいたった「救済史」の概念を、極めて包括的な見地において究明している。本論文の諸章は、時を異にして独立に発表されたものであるが、それぞれの諸論文は有機的な連関をもち、全体として「救済史の神学」と呼ばれるのにふさわしい統一を保っている。そのような統一を支えている著者の根本思想が、カール・バルトの神学に負うところ極めて大であることは、本論文において明瞭に看取されるところである。著者は、多年に亘ってバルト神学に傾倒し、これを日本の神学界に紹介する上に与って力があつた。しかし著者の神学的立場は、単にバルト神学の模写にすぎないようなものではなく、それがよく著者自身の思想として血肉化され、殊にキリスト教歴史観において、より具体的にいえば、救済史のキリスト論的構造の究明において、独自の展開をとげていることが本論文において示されている。いわゆる「救済史」の概念自体が決して一義的なものではなく、さらに、「救済史」の「神学」なるものが成立するかいなか、現代神学の一つの焦点的問題として問われているとき、著者がこの書において提示する積極的な回答——特にブルトマン神学との対決において——は、今後この問題に対する貴重な一指標として、日本においてのみならず、欧米の神学界においても、顧みらるべき価値を有すると考えられる。著者の提示するキリスト論的救済史観は、一面においては余りに神学的であつて、種々の形態における歴史哲学との対決の仕方において、或いは、近代史学の成果を媒介するという点において、不充分であることを免れないと思われるが、他面、それにもかかわらず、キリスト教的歴史観の特質を、あらゆる世俗的歴史観との対比において、極めて尖鋭な形で浮き彫りにすることによって、近代的歴史観の内包する問題性打開のための示唆を与えるところが少なくないと思われる。なによりも、この論文が、極めて多面的包括的な諸問題を取扱いながら、しかもキリスト論的に首尾一貫したキリスト教歴史観を提示し得たことは、キリスト教学界にとって貴重な貢献をなすものであると考えられる。

よつて本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。